学位請求論文審査報告要旨

2015 年 3 月 11 日

申請者　　宮部　真由美
論文題目　現代日本語の条件を表わす複文の研究
　　―ト条件節とタラ条件節を中心に―

論文審査委員　　庵　功雄
　　山崎　誠
　　前田直子

１．本論文の内容と構成

本論文は、現代日本語の条件を表す複文のうち、ト条件節とタラ条件節に焦点を当て、両者の異同を丹念に記述したものである。

本書の構成は次の通りである。

序論
本論
第１章　分析の観点と概要
　1. はじめに
　2. 分析の観点
　3. 第Ⅰ部・ト条件節を従属節とする従属複文について
　4. 第Ⅱ部・タラ条件節を従属節とする従属複文について
　5. 第Ⅲ部について
第Ⅰ部
第２章　従属節に「仮定条件」をさしだすシナイト節を従属節とする従属複文
　1. はじめに
　2. 望ましくないものをさしだすシナイト節の従属複文とは
　3.「仮定条件」節を従属節とする従属複文の主節に用いられるスルとスルダロウ
　4. シナイト節を従属節とする従属複文の位置づけ
　5. 第２章のまとめ
第３章　ト条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合
　1. はじめに
　2. 先行研究
　3. 分析の観点
　4. ひとつづきのものとして表わすこと
　5. 従属節と主節の時間的な関係
　6. 第３章のまとめ
第４章　ト条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合

1. はじめに
2. 分析の対象
3. スルト節と「仮定条件」
4. スルト節の従属複文とシテ節の複文
5. 第４章のまとめ
第５章　ト条件節の従属複文の従属節とモーダルな側面
1. はじめに
2. 従属節がシナイト節の場合
3. 従属節がシヨウト節の場合
4. 従属節がスルト節の場合
5. 第５章のまとめ
第Ⅰ部のまとめ
1. 「きっかけ」の意味･用法との関係
2. シナイトの形になることとの関係
3. 従属節の時間的な限定性との関係
4. まとめ
第Ⅰ部のまとめ
第Ⅱ部
第６章　タラ条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合
1. はじめに
2. 先行研究
3. タラ条件節を従属節とする従属複文がすでにあることがらを表わす場合
4. 先行研究への位置づけ
5. 第６章のまとめ
第７章　タラ条件節を従属節とする従属複文がまだ起こっていないことがらを表わす場合
1. はじめに
2. タラ条件節を従属節とする従属複文の主節と従属節の意味類型と複文
3. タラ条件節の「仮定条件」とは
4. 第７章のまとめ
第８章　タラ条件節を従属節とする従属複文の従属節とモーダルな側面
1. はじめに
2. 従属節の形態的な特徴
3. 従属節の独立性
4. 従属節のテンス的な意味
5. 第８章のまとめ
第Ⅱ部のまとめ
第Ⅲ部
第９章　手順テクストにあらわれる時間関係と条件関係の接続形式
1. はじめに
2. 対象とするテクスト

3. 手順文とは
4. 分析結果
5. 第 9 章のまとめ
用例採集資料の例
第 10 章　スルト節、シタラ節、シテ節と継起性
1. はじめに
2. 問題の所在
3. 継起性をもつスルト節、シタラ節、シテ節との関係
4. 第 10 章のまとめ
結論
1. ト条件節とタラ条件節の従属複文の基本的(本質的)な意味
2. ト条件節を従属節とする従属複文について
3. タラ条件節を従属節とする従属複文について
4. ト条件節とタラ条件節の従属複文とが比較･対照可能な箇所とその違い
5.「きっかけ形」、「契機的なつきそい･あわせ文」ということと、今後の課題
参考文献一覧
用例採集資料

２．本論文の概要

本論文は 3 部 10 章からなる。

第 1 章では、全 3 部の構成と分析の観点が示される。

第 2 章から第 5 章は第Ⅰ部を構成する。この第Ⅰ部では、主にト条件節について、詳しい検討がなされている（なお、本論文では、肯定形と否定形を総括する場合は、ト条件節、タラ条件節といった用語が、肯定形、否定形などを個別に問題にする場合には、スルト節、シナイト節、シタラ節、シナカッタラ節などの用語が使われている）。

第 2 章では、シナイト節について論じられており、第Ⅰ部の中心的な内容となっている。

条件を表す複文のうち、性質が似ているものにト条件節、タラ条件節、バ条件節がある（ナラ条件節はこの 3 つとは少し性質を異にする）が、否定形したときに、ト条件節と、タラ条件節／バ条件節の間には非対称性がある。すなわち、タラ条件節／バ条件節の場合は、肯定形（シタラ節／スレバ節）と否定形（シナカッタラ節／シナケレバ節）で、後件に違いが生じるということは特にないのに対し、ト条件節の場合は、否定形（シナイト節）は、アクチュアルな（具体的な時間軸に位置づけられた）条件文としては使えず(ex. 先週の日曜日に会社に｛行くと／行ったら／*行かないと／行かなかったら｝、上司から叱られた。)、さらに「仮定条件」を表す場合には使えるものの、その後件は「望ましくないことがら」に偏る（ex. 宿題をしないと、おやつをあげないよ。）ということがある。シナイト節におけるこの分布の偏りはこれまでの研究でも指摘されていたが、その理由については、明示的な分析は行われてこなかった。

この点を宮部氏は次のように説明する。

まず、条件を表す複文の意味は、「前件 p のことがらの成立によって、どのようなことがら q が成立するかという話し手の推論を述べる」ということであると規定し、こうした

規定に最も典型的に当てはまるのは「仮定条件」であり、それを表すのはタラ条件節／バ条件節であるとする。一方で、シナイト節は「仮定条件」で使えるが、単に否定命題を条件として述べる（ex. 雨が降らない、ということを条件として述べる）のであれば、タラ条件節の否定形（シナカッタラ節）／バ条件節の否定形（シナケレバ節）を用いれば十分であり、シナイト節が存在する意義は少ない（肯定形＜スルト節＞はまさにこの理由でほとんど「仮定条件」では使われない）。それにもかかわらず、シナイト節が「仮定条件」で使われるのは、後件に「望ましくないことがら」を述べるという機能に特化したためである、ということである。

このことを裏付けるデータとして、日本語母語話者に対するアンケート結果が付されている。それによると、シナカッタラ節／シナケレバ節では、「だろう／かもしれない」などの有標のモダリティ形式がついた場合の許容度が相対的に高いのに対し、シナイト節では、これらの形式がつかない無標の形式の場合の許容度が相対的に（統計的に有意なレベルで）高かった。これは、シナカッタラ節／シナケレバ節が話し手の「推量」を表すのに対し、シナイト節は「推量」ではなく、「望ましくないこと」という話し手の心的態度を表すためと考えることで初めて説明できる言語事実である。

また、この章の分析の中で、主節のスル（無標形式）の意味として、「スル（意志）」（ex. 来年は留学する。）、「スル（予定）」（ex. 5 時になったら、出発する。）、「スル（予測）」（ex. 太郎はパーティーに来る。）の 3 分類を立てている。

第 3 章では、ト条件節の従属複文がすでにあることがらを表わす場合（ex. 窓を開けると、富士山が見えた。）についての分析がなされている。この用法では、肯定形（スルト節）は使われるが否定形（シナイト節）は使われない。宮部氏はこの理由を、ト条件節からなる複文は、従属節と主節のことがらが「同時･直前」の時間関係にあり、この二つのことがらを、両者を通じて一貫し全体をなすひとつづきのものとしてとらえているということを表わすものである一方、話し手のとらえかたとしては、従属節と主節のことがらの生起を「先－後」の順にとらえて表わしているためである、としている。

第 4 章では、第 3 章のスルト節の従属複文の分析結果を受けて、まだ起こっていないことがらを表わす場合のスルト節（ex.明日雨が降ると、涼しくなるだろう。）について分析が行われている。その結果、第 3 章の場合と同じく、こうした「仮定条件」的に見える場合でも、スルト節は「同時･直前」の時間的な関係を表わし、従属節と主節のことがらをひとつづきのものとしてとらえていることを表わす、という特徴は共通しており、「仮定条件」的に見えるのは、主節が第 2 節での分析で用いられたスルの 3 分類で言う「スル（予測）」を表すためであるとしている。

第 5 章では、従属節のモーダルな側面という観点から、シナイト節・スルト節に加えてシヨウト節について考察が行われている。

第 6 章から第 8 章は第Ⅱ部を構成する。この第Ⅱ部では、主にタラ条件節について、詳しい検討がなされている。

第 6 章では、タラ条件節がすでにあることがらを表わす場合（ex.朝起きたら、外は雨になっていた。）についての分析が行なわれている。その結果、スルト節では、従属節と主節とに二つのことがらをさしだしているものの、話し手はそのことがらをひとつづきのものとして表わしているのに対し、タラ条件節では、話し手はそれぞれのことがらを独立・

個別なものとして表している、としている。そして、ト従属節は時間的な関係を表し、完成的な内容を表せないのに対し、タラ従属節は条件＝時間的な関係であり、話し手は従属節のことがらを完成したものとして表している、ととらえている。また、ト従属節では否定形（シナイト節）がすでにあることがらを表すのに使われることはないのに対し、タラ従属節ではそれが可能である（ex.いたずらを｛*しないと／ok しなかったら｝、先生にほめられた。）というのも、両者の違いを上記のようにとらえることで説明できる。

第 7 章では、タラ条件節がまだ起こっていないことがらを表す場合について、従属節のモーダルな側面に、「予測・可能性」（ex.いたずらが見つかったら、叱られるかな。）、「確認・予定」（ex.お母さんが帰ってきたら、驚くわ。）「確認（事実とは反対）」（ex.大勢人がいたら、わからなかったかもしれない。）が見られることが示されている。

第 8 章では、タラ条件節に話し手がどのようなものをさしだすかということを考えることによって、タラ条件節による「仮定条件」の内容がどのようなものであるかということ、そして、ト条件節との違いが、より明確にとらえることが論じられている。その際、これらの複文の従属節のことがらのテンス的な意味（未来、現在、過去、超時）がどのようなものであるかということも考える必要があることが説得的に論じられている。そして、このことから、ト条件節とタラ条件節をとらえるために、モーダルな側面とテンス的な意味とを考えることが重要な観点であることが示されている。

第 9 章と第 10 章は第Ⅲ部を構成する。

この第Ⅲ部では、それまでの議論を受け、そうした特徴を持つト条件節、タラ条件節が持つ機能が論じられている。

第 9 章では、「手順」を表すテクストの例として、電化製品（ブルーレイプレーヤー）の取扱説明書を取り上げ、テクストの構造の中で、ト条件節、タラ条件節、およびそれらとの類義表現がどのように用いられているかが詳細に検討されている。このうち、スルト節は「操作に関してなんらかの説明をする文」で使われ、警告を与える場合に使われることが多かった（ex.操作を誤ると、故障の原因になります。）。一方、シタラ節は「主となる手順･方法を述べる文」で使われており、シタアト節、シテカラ節と類義表現を構成しつつ、それぞれの中で独自の使われ方をしていることがわかった。

第 10 章では、「継起性」という観点から、スルト節、シタラ節、シテ節の異同が検討されている。

３．本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

第一に、従来、「継起的な関係を表す」として、類似性・対称性が指摘されながらも、その違いが不明確であったト条件節とタラ条件節を、「すでにあることがらを表す場合」と「まだ起こっていないことがらを表す場合」の双方について、包括的に論じていることである。特に、これまで中心的に論じられることがなかった否定形（シナイト節、シナカッタラ節）についても詳細に分析を加え、その特徴を明らかにしたことは特筆に値する。そして、シナイト節が「すでにあったことがらを表す場合」には使われないこと、および、「望ましくないことがら」を表すために用いられることを、実例の観察をもとに明らかにし、その理由についても独創的かつ説得的な議論を行っている。

第二に、定量的な観点を取り入れることによって、議論を前進させたということがある。これまでの研究では、ある表現が可能（文法的）か否か（非文法的）かという観点からのみ議論が行われていたため、議論が行き詰まっていたところがあるが、宮部氏はアンケート調査などの定量的な観点を取り入れることで、問題の所在を明確化し、議論の透明性を高めることに成功している。

第三に、従属節の分析に際し、主節の意味類型を考察の対象に加えたということがある。これにより、従属節（特に、タラ条件節）の意味分析により実効性を持たせることに成功している。

第四に、実際のテクストの中でのこれらの従属節が果たす役割という観点を分析に持ち込み、手順文のテクスト分析のあり方に、一つの確かな方法を提示することに成功しているということがある。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も存在する。

第一に、シナイト節が「望ましくないことがら」を表すために用いられる理由については、さらに踏み込んだ説明が求められるということがある。本論文で挙げられている議論は、「望ましくないことがらを表すものがあるとすれば、それはシナイト節である」という「状況証拠」に留まっており、もう一押しの論証があればと思われる。

第二に、アンケートにおいて、回答者の負荷を考慮して設問数を減らした結果、回答結果の解釈について、本論文の解釈と異なる解釈が生じる余地を残してしまっているということが挙げられる。

第三に、ト条件節は完成を表さない、タラ条件節は完成を表すという特徴付けについては、例えば、三上章が活用表において「タラ」を「完了の条件形」としているように、形態論との関係も視野に入れるべきであったかもしれない。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、宮部氏自身もこれらの問題点に気づいており、今後の研究において、上記の問題点も確実に改善されると考えられる。

４．結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、宮部真由美氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終審査結果の要旨

論文審査委員　　庵　功雄
山崎　誠
前田直子

2015 年 2 月 24 日、学位請求論文提出者、宮部真由美氏の論文「現代日本語の条件を表わす複文の研究―ト条件節とタラ条件節を中心に―」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、宮部氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、宮部真由美氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。